

# 「2017 NAB ショー」を飾った 中継車、車載局、可搬局、超小型衛星通信端末

神谷 直亮

今年の「2017 NAB ショー」(4月22日～27日、米ラスベガスで開催)で、特に目立ったのは、初出展を飾ったオール・モバイル・ビデオ、ギアハウス・ブロードキャスト、モバイルTVグループの3社が出展した4KやVR制作用の大型中継車であった。

ニューヨークを本拠にするオール・モバイル・ビデオ社は、4Kハイダイナミックレンジ(HRD)映像制作用の大型中継車と、子会社のVRLIVEが所有するVR映像制作用の中継車を目玉にして出展した。「Zurich」と名付けた4K HDR中継車には、ソニーのビデオスイッチャ(XVS-8000)とスチューダー社のオーディオコンソール(Infinity Series Vista X)が設置されていた。SW卓とVE席に配置された3台の4Kモニターもソニー製であった。VR中継車では、車上に設置したノキアのVRカメラ「OZO」で撮影した展示会場の映像を、朋栄のビデオスイッチャ(HVS-390HS)を使ってライブ中継するデモが行われた。中継先は、Igloo Vision社がこの中継車の傍に設営したドーム状のミニシアターで、

中を見せてもらったら台湾のBenQ社製の 프로젝タを5台使って360度シームレスな映像を上映していた。

ギアハウス・ブロードキャスト社は、「Columbus」と銘打った最新のトレーラ型中継車を出展して脚光を浴びた。車内には、アメリカのBoland社の22インチ4Kモニターが22台整然と並んでいて壮観であった。また、Imagine Communications社の「プラチナムIP3 28RU ルーター」が搭載されており、将来を見越したSDI-IPハイブリッド設計になっているのが印象に残った。カメラについては、「ソニーのHDC-4300を22台購入してフルに活用している」と語っていた。

コロラド州イングルウッドに本社を構えるモバイルTVグループは、「39 Flex」と呼ぶ4K HDR大型中継車を屋外展示場に出品した。車内を見せてもらったら、グラスバレーの4Kスイッチャ「Kayenne K-Frame」とマルチビューワ「Kaleido」、Calrec社製のオーディオコンソール

「Artemis」などが搭載されていた。4Kカメラについては、「13台まで扱える。スローモーションカメラもグラスバレーのLDX Xtreme Speed Super Slowを2台常備している」と語っていた。説明員によれば、「モバイルTVグループは、2015年から4K中継車を運用しており、代表的な実績としては、DirecTVとCBSスポーツ向けに行ったマスターズ・ゴルフ・トーナメントが挙げられる」という。

次いで、NABショー常連のガーリング&アッソシエイツ(G&A)とTVプロ・ギアの両社が、上述した3社に負けるわけにはいかないとして最新の中継車と車載局を出展して競演した。

G&A社は、Proshow Broadcast社向けに製作した2台の中型OBVANを披露した。「Maestro」「Ovation」と名付けられたこれら2台の中継車はフルHD用であり、意外だとコメントしたら「4KとVR用の中継車も製作実績があるが、今回オーナーとの話し合いがつかず出展できなかった」と悔しげに語っていた。昨年披露した

NextVR社のVR中継車をもう一度見たいと思ったと告げたら「使用予定が詰まっています、展示会どころではないのが実情」とのことであった。

TVプロ・ギア(TV Pro Gear)社は、今



写真1 オール・モバイル・ビデオ社は、子会社のVRLIVE社が所有するVR中継車を出品して注目を集めた。



写真2 モバイルTVグループは、グラスバレーの4Kスイッチャ、マルチビューワなどを搭載した大型中継車を披露した。

回、「4K Flypak」中継車とインテル社向けに製作した「True VR」と呼ばれる最新のVR中継車を展覧して来場者の目を引いた。4K中継車は、昨年展覧したものと同様で、社内の機材は、ATEMライブプロダクションスイッチャをはじめとして、ほとんどがブラックマジックデザイン社製であった。インテル「True VR」の車内では、3月に開催されたバスケットボールの全米大学ナンバーワンを決めるNCAAトーナメントの決勝戦を撮影したVR映像が流れていた。説明員によれば、「28台の5Kカメラで撮影した」という。

さらに、車載局の分野でフロントライン、オン・コール・コミュニケーション、ライマン・ブラザーズなど6社がブースを構えて売込みに余念がなかった。

フロントライン社は、今回、悪天候や悪路にも耐えられる車載局に焦点を当てて展覧した。その一例が、「Weather Chaser」と名付けられた厳しい環境下でも使えるように設計したというSUVシャシー・ベースの車載局であった。通信機能を聞いてみたら「Ku-IP衛星通信、Kaブロードバンド衛星通信、ボンデッド・セルラー、マイクロウェーブ・ネットワークの4系統に対応している」と答えていた。

オン・コール・コミュニケーションズ(On Call Communications)社は、同社が誇る「QuickSpot」と「SkyLink」を紹介した。「QuickSpot」は、IPに特化した車載局で、伝送速度20Mbpsまでのサービスが可能と売り込んでいた。料金を聞いてみたら「サービスレート20Mbpsの場合で、1分8.25ドル」との回答であった。

ユタ州に本社を構えるというライマン・ブラザーズ(Lyman Brothers)社は、LBI Satと名付けた車載局を披露した。同州のワイルダーニュース社向けに製作した特注の車載局とのことであった。

可搬局の分野では、AvLテクノロジーズ、ゼネラル・ダイナミクス、コプハム、Vislink、Superior Satelliteなどが目に付いた。

AvLテクノロジーズ社は、低軌道周回、中軌道周回、静止衛星をすべてトラッキン



写真3 インテル「True VR」の車内では、3月に開催されたNCAAトーナメントの決勝戦の模様を撮影したVR映像が公開された。



写真5 チャレンジャー・コミュニケーションズは、中国のスターウィン社製の平面アンテナを紹介して、来場者の関心と呼んだ。

グできるというマルチオービット、マルチバンド可搬局を紹介して話題になった。

ゼネラル・ダイナミクス社は、「uPak」と名付けた超軽量、超コンパクトにもかかわらず展開性能に非常に優れた可搬局を前面に押し出していた。重量は、「uPak」が15kg、「uPod」が23kgとのことであった。

コプハム社は、アンテナ直径75cmの「Explorer 5075GX」と1mの「Explorer 8100」可搬局を目玉にして展覧した。前者は、インマルサットが構築中のグローバル・エクスプレスKaバンド衛星に対応するシステムである。

超小型衛星通信端末(VSAT)に関しては、パラボラより平面アンテナが目を引いた。長方形型と円形型の2種類の平面アンテナがあり、シンコム(ThinKom)社が、これら両方を一気に紹介して注目を集めた。同社の長方形型平面アンテナは、「ThinPack Ku100i」と「ThinPack Ka100T」の2種で、パラボラアンテナに換算して両機種とも直径60センチ相当という。伝送速度については、どちらも上り10~16Mbps、下り20Mbpsと説明していた。「ThinSat300」と呼ぶ円形平面アンテナは、乗用車の車上に搭載して展覧していた。上り用と下り用に2面を別々に使用する設計になっているのが難点と思われたが、こ



写真4 AvLテクノロジーズ社は、低軌道周回、中軌道周回、静止衛星をトラッキングできるというマルチオービット、マルチバンド可搬局を紹介して話題になった。

のため衛星の捕捉に要する時間はわずか60秒とPRに余念がなかった。

変わったところでは、チャレンジャー・コミュニケーションズが、中国から輸入したという平面アンテナ(才数、610 x 570 x 20mm)を展覧していた。メーカー名、型式、対応する周波数を聞いてみたら、「スターウィン(Starwin)社のQDT-570D型平面アンテナで、Kuバンド用とKaバンド用の2種類を用意している」と答えていた。説明員によれば、「両機種とも、すでにインマルサット、SES、ユーテルサットの型式認証を取り付けた国際的に認知された製品」とのことであった。価格を問い合わせてみたら「1台2000ドルの超低価格」と答えていた。

なお、3D関連の機材は、NABの会場からすっかり消えてしまったが、帰国の途上に、ラスベガス空港で3Dのスロットマシンを3台見つけた。トライしてみたら、ヒットすると竜が画面の上に飛び出してくる仕組みになっていた。しかも、赤、青、緑の3色の竜がヒットのレベルによって飛び出してきた舞うという念の入れようであった。

Naoakira Kamiya  
衛星システム総研 代表  
メディア・ジャーナリスト